

〈原著論文〉

「非認知能力」を育てる絵本の効果的活用 —国語科・道徳科の授業を通して—

Effective use of picture books to nurture non-cognitive abilities

—Through classes in Japanese language and Moral—

岡山県生涯学習センター 出井 桂治^{*1}

要約：現代のように、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化していく時代にこそ、数値には表れにくい自己の内面に潜在する力の育成が重要である。本研究では、絵本を教育現場において積極的に活用することで子どもたちのよりよい成長の基盤となる力（非認知能力）を養うことができると考え、絵本を活用した授業実践に基づき、絵本を教材として扱う有効性や実践から見える子どもたちが育む力について検証した。教材としての絵本の価値を分析しながら、具体的にどのような場面で有効活用できるのかを既に絵本が教材として位置付いている「国語科」「道徳科」の授業を中心にして、活用方法や展開を工夫しながら授業実践を行った。

絵本を活用した授業では、多くの子どもたちが授業の中にしっかりと入りこみ、自分の考えをもちながら仲間とともに話し合いを交わし、そして終末には授業前と後の向上した自分を実感する、そんな場面が多く見受けられた。これらの授業では、子どもたちが自分なりの課題をもちながら、見方・考え方を使い、よりよい考えを導こうとする創造的思考を養うこともできる。

A I 技術が急激に発展していく中、アナログの必要性和良さを見直し、教師が絵本の有効性をいかせる授業をもっと積極的に取り入れ、質の高い学びが積み上げながら、子どもたちの内的学力を高めていくことが必要である。絵本の教材化に焦点をあてた研究は、子どもたちの非認知能力を育成するために有効であり、他教科での学習など、様々な教育活動に位置付いていくことで、さらに確かなものになる。また、教師にとっても教師力が高まり、充実した授業を作り上げていく有効な手立てである。時代が流れても様々なテーマで多くの絵本が発行される中、この「絵本の力」で子どもたちと教師との共有する時間を充実させることができ、子どもたちの力を効果的に高めていくことが可能である。

Key words：絵本 非認知能力

1. はじめに

「時代」が大きく動き、子どもたちを取り巻く環境が、加速しながら変化している。また、コロナ禍も重なり、社会環境や家庭環境の急激な変化は子どもたちの心と体に大きな影響を与

えている。時代は変わっても、変わらないもの変えてはいけないものがある。教育も例外ではない。GIGA スクール等の利便性や効果的な活用も取り入れながら、アナログの必要性を見直し、「絵本」という媒体が教育現場でもっと積極的に活用されることで現代の子どもたちに必要な力をより一層育むことができる。

^{*1} Keiji IDEI
Okayama Prefecture Lifelong Learning Center

学習者としての子どもたちが、新しい力を獲得するために、絵や映像を受動的に受け取るだけでなくデジタルでもできる。ましてや、デジタルのほうが手軽に何度でも多くの情報を得ることができる。しかし、これだけでは実際にあるものに「触れる」「直接会話をする」などの「感覚的に学ぶ」ことは難しい。絵本は読み聞かせなどの大人とのコミュニケーションや子育ての中で以前から生活の中にあった。石崎(1995)は、絵本研究の動向を探り、子どもたちが絵本を通して、話し言葉や書き言葉を学んだり、文化的価値観を身につけたりしていることをまとめ、大人と子どもが一緒に絵本を楽しむ時間が大切だという。身近な大人たちとの絵本を通じた交流が、子どもたちにとっては「生きる力」の基盤となる。

現学習指導要領では、学力が「基礎的な知識及び技能の取得」「知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点が提示された。「生きる力」を育むこの3つの観点は、実際に数値として表せるものと表せないものがあるが、これらの観点に照らし合わせた子どもたちにとって必要な力をバランスよく育成していくことが、子どもたちの基盤となる力を育むことになる。特に、子どもたちの「態度・行動」それらの起因となる「思い」や「考え」などは、数値で見取することは難しい。しかし、これらの数値で見えにくい力（非認知能力）こそ、これからの教育においてしっかりと育てていかなければならない大切な力である。

子どもたちにとって必要な力を養うには、「単元だけにとらわれない学習」「自分で問いを立て解決に向かおうとする学習」「他者との対話の中で興味関心を広げる学習」「様々な人のかかわり中で学ぶ学習」「それぞれの教科学習の価値を見いだしながらの学習」等の学習が考えられる。これらの学習を構築していく上で、

多様なテーマを有する「絵本の力」と子どもたちにつけたい力が合致したとき、絵本は教材として大きな力を発揮する。

小学校教育において山元（2014a）は国語科の中で絵本が果たす絵本の役割について、その価値について研究を続け絵本を楽しむことから読解力が高まっていくこと明らかにしている。根岸・庄井（2019）は、対話的な絵本の読み聞かせが子どもたちの非認知能力の涵養に与える影響について、その効果を提示した。三森(2002a)は絵本が論理的思考を育てるのに有効であることを提唱している。渡辺（2011a）は絵本利用による「思いやり」育成についてその意義と具体的な授業展開についてまとめ、小野間（2015）はさらにそれを具体的な実践事例を通して立証している。

このように従来から学校教育において絵本の活用が有効であると考えられ、その応用と実践的な検討は深められてきた。筆者（1994）も30年前から、絵本がもつ力を現場で活かす試みをしてきた。しかし現在、教育現場において、この有効な力が教育課程の中で有効に活かされているのであろうか。時代が動いても「絵本の力」を教育活動において積極的に取り入れることで、子どもたちの学びの質を高め、深めることができる。教科書中心の学習だけでは得られないものが、絵本を活用する学習活動を構築することで、自分や友達との対話が生まれ、新たな気づきや発見があり、数値では測定しにくい、子どもたちにとって必要な力（非認知能力）を育てることができる考える。

本研究では絵本を教育現場において積極的に活用することの教育的価値を見だし、絵本を活用した授業実践に基づき、子どもたちの能力の育成への教育的意義について明らかにした。絵本そのものの魅力をいかしながら、その「絵本の力」を教育の中でどのように活用し、子どもたちのどんな力を育成していくことがで

きるのか。絵本の可能性は無限であり、教育活動のいろいろな場面での活用が模索できる。既に絵本が教材として位置付いている「国語科」「道徳科」の授業を中心に、そこにどんな活用方法や展開を工夫すればさらに深化した授業実践ができるのかを研究し、他の教科・領域での積極的な活動につながる一提案としたい。

2. 現代教育が求めるものと絵本

(1) 教育現場における現状と課題

急激な社会の変化は「時代」という大きくくりでも表現される。「Society5.0 時代」や新型コロナウイルスの感染拡大などによる「予測困難な時代」。社会環境や家庭環境の急激な変化は子どもたちの心と体に大きな影響を与えている。「自尊感情の低下」「コミュニケーション能力の低下」「体力・運動能力の低下」「生活習慣や食生活の乱れ」「情報モラルの課題」などの実態から、「いじめ」「不登校」「貧困」といった子どもたちの命にかかわる現状課題も深刻である。

中央教育審議会では、新学習指導要領の着実な実施と GIGA スクール構想に象徴される ICT 活用の推進が示された。急激に変化する時代の中で育む資質・能力として、一人一人の子どもが、自分のよさや可能性を認識し、他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り開き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要だとする。

学校教育においては、「夢」や「目標」をもつ力などの「自分を高めるために必要な力」や、地域や社会に貢献しようとする強い意志など「主体的に社会参画するために必要な力」を育んでいかなければならない。

全国学習状況調査の結果（令和5年度）によれば、「夢や目標がある」と答えた子どもたち割合は小学校6年生で約60.8%である。この数

字は子どもたちが「夢をもてない」のではなく、「夢と出会えてない」あるいは「夢について考える時間がなかった」のではないかと考える。ともすれば受動的になりがちな子どもたちが、人やものと出会い、体験し、自分なりの考えをもつことで、「夢」を追うことができる主体的な姿へと変容することができるような教育実践を進めていかなければならないのである。

(2) 今だからこそ大切にしたい教育の「不易と流行」

「学校」が「学校」である意味は何か。それは、子どもたちがいろいろな人とののかかわりの中で、自分を育てていくことではないだろうか。「個に応じた指導」は GIGA スクール構想のもと「個別の指導」に重点がおかれ、「個別最適化」を重視する時代に向かう中、学校教育の不易を捉え直す必要がある。

2021（令和3）年1月26日の中央教育審議会には「『令和の日本型学校教育』の構築」という言葉がある。「知」「徳」「体」を一体的に育むことを日本型教育とするならば、近年は特に「知」における狭義の学力に関心が傾き過ぎていたのではないか。指導者たちはもっと発想を柔軟にし、子どもたちの非認知的能力を育み、心躍る活動の創造をすべきである。

そのためには、指導の型にとらわれることなく、子どもたちの興味を引き出し、自らの問いが生まれ、それを探求できる姿にしなければならない。群れて友だちと遊ぶ姿、教室から響きあう子どもたちと教師の声、窓越し聞こえる歌声や音楽、廊下に漂う献立の予感など、どれもデジタルでは実感は伝わらない、本来の学校の姿である。今後の教育活動においてデジタルの利便性を積極的に活用しながらも、アナログの必要性を見つめ直すべきである。タブレットをメインに学習していく教育の流れに、紙や鉛筆に触れながらの学習や教師の語りや友だちの会

話から新しい自分に出会える学びをしっかりと位置づけ、継承していくことが重要である。

(3) 絵本の教材としての可能性

日本では従来、絵本が「親子のコミュニケーション」「情操教育」といった視点で、かかわってきた。幼児教育においては保育者による読み聞かせが根付いている。幼年期より、積極的に様々なテーマを取り上げた絵本を活用し、子どもたちの育成を図ってきた。現在ではアメリカでの教育理論をもとに絵本の効果的な活用が提起されている。加藤(2020)は日米の読み聞かせを比較し、「思考力(自分で考える力)」「伝える力(自分の意見を言う力)」「読解力(文章の内容を深く理解する力)」を育むためには、それを目的としているアメリカ式の読み聞かせから、絵本を目的をもった教材として活用することを推奨する。また、佐々木(2000a)は、心理学の視点から、人間発達のモデルとして、絵本の中にある物語には人格をもった現実の子どもがいきいきと感じられるとする。三森(2002b)は絵本は「絵とテキストの両方があること」「子どもが大好きで、楽しみを提供するものであること」から、分析的で理論的な思考力を引き出すのに大変有効な媒体であると述べる。

絵本が物語や思想を表現し、伝達するための手段として、積極的に評価されるようになったのは、アメリカでは1939年代から50年代にかけてである。日本においては1970年代以降に認識されてきた概念である。

鈴木・永田(2017)は各教科において、絵本がどのくらい活用されているかを調査し、子どもたちが日常の中でイメージしにくい事柄について、絵本が効果的な教材であることを示した。山田(2020)は、絵本を教材として用いる意義として「異学年で読む楽しさを共有できる教材であること」「学習者の思考を言葉にする手掛かりとなる教材であること」を明らかにした。

多賀(2018)や齊藤(2022)はそれぞれ小学校現場での実践をもとに、道德の時間における絵本の効果的な活用や指導のテーマに沿った絵本について紹介している。

しかし、絵本の有効性を提唱する論文や実践はこれまでも数多く報告され、毎年、新刊絵本が約1,800冊出版されている中、この絵本の力が教育現場では十分にいかされず子どもたちの内的能力育成につながっていない現状がある。絵本を通して子どもたちが様々な場面にもっと出会い、自分事として考える中で自己形成することができるよう、絵本の教材化を含めた優れた実践を教育課程の中に位置づけ、教師が確実に実践していくことが必要なのである。子どもたちが会える絵本をどの場面でもどのように活用するのかはそれぞれの発達段階、教科内容等、またその場の子どもたちの実態によって異なるものであるが、絵本との出会いは自分の心をそこに投影しながらの学びとなる。

3. 絵本を通して育てたい力

(1) 学びを支える「非認知能力」の育成

「非認知能力」という言葉は、一般的にテスト等で点数にできない力の総称として使われている。これは言葉の通り、テストや測定等で数値化でき、明確に認知できる能力としての「認知力」に対して、数値化できず認知できない能力として「非認知能力」と考えられている。子どもたちがもつ「能力」そのものを数値では測定できない面があるという解釈が広がっているのである。

1960年代ミシガン州で実施されたペリー就学前計画の結果から、数値化できる認知能力の発達に差がない場合でも、人生の様相に差ができるのは、まさに非認知の力だと推測された。数値で計れる力のみに偏った従来詰め込み型の教育で数値が向上したとしても、それは必ずしも子どもたちのよりよい人生につながるとは言え

ない。認知能力と非認知能力には相関関係があり、この両者が伸びていくことで、総合的な人間力の向上につながっていく。今後は、それぞれの能力がバランスよく、子どもたちの成長につながっていく実践と研究がさらに必要になっていく。

非認知能力という見えない力は、表面的なスキルから個人の特性的なものまで、いくつかの階層的な関係になっていることから、この力の捉え方を複雑にしている。その子その子の表面的な言動から、生まれもっての内面的な気質や性格といったこともある。このような非認知能力を段階的に遠藤（2017）らは次（図1）のように整理した。



図1 非認知能力の段階的構造 [遠藤利彦（2017）をもとに筆者作成]

また、中山（2020）は、この中間層の力は発達段階の様々な経験と学びの中で形成されるため、乳幼児期以降の児童期や青年期以降であっても伸ばすことができるとし、教育現場で伸ばすことができる非認知能力を「自分と向き合う力」「他者とつながる力」「自分を高める力」の3つの枠組みに整理している。3つの分類の中にあっても、これらの内面に関わる力は、それぞれ明確に分類され伸びていくのではなく、その状況に応じて必要な力を高め合ったり、引っ張り合ったりしながら使いこなすことが大切であり、これらの力を必要な時に意識的に伸ばして、状況に応じて意識的に使いこなせるようにしたいとしている。

2007年の学校教育法の改正から、2018年の学習指導要領改訂と教育現場で子どもたちに育むべき力の育成について捉え方が大きく変化した。「学習に対する意欲」から「学びに向かう、人間性等」とフルモデルチェンジしたのである。このように見えにくい力を子どもたちに育てていくためには、この力をどう捉え、どう評価していくのかも具体的な子どもの姿を目標に設定し、考えていかなければならない。

（2）よりよい考えを導く「創造的思考」

子どもたちの中に既に内包している力を再構成しながら課題解決に向かう中で自己を見つめ、よりよい社会に向かって価値を更新し続けながら、その力を養っていくためには自分一人では引き出すことができないことを、学校という場所で、人とかかわりの中で主体的に学ぶことが必要である。

三森（2002c）は絵本を用いて子どもとのコミュニケーションをとりながら、情報を分析し、解釈し、批判的に検討するために必要な回路をつくることを提唱している。いろいろな場面を想定しながら自分の考えをもち、自分自身との対話の中で筋道が適切になるように考えることを通して、人に伝える力（論理的思考）が培われていくのである。

子どもたちが実体験だけではなく、いろいろな場面に出会うことができるよう絵本の中の光景や場面に自分を投影し、思いを導き出しながら、自分なりの言葉で論理だて分析したり、解決に向けての思考を働かせたりすることで創造的思考を養っていくことができる。多様な課題に遭遇するであろうこれからの時代に、問題解決の中核となる創造性をもった思考を働かせる力は、21世紀を生き抜く上で必要な資質・能力である。

(3) 絵本活用の授業で育つ「見方・考え方」

「見方・考え方」というのは、教科ならではの対象への関わり方、アプローチの仕方であるため、指導者にとっては「見方・考え方」を意識することで指導が一貫したものになり、また、授業を受ける側の子どもにとっても学び進む方向がはっきりしたものになる。個別の授業は、それぞれ違う対象や内容を扱うわけだが、授業で扱われるものに連続性や関連性が見えて、大切な概念や観点が理解できるようになるとともに汎用性のある思考方法、表現方法を活用できるようになる。そのような学習の連続の中で知識や技能もばらばらのものではなく、関連したもの、統合されたものとして認識されるようになり確かな概念へと高まっていくことが期待できる。「見方・考え方」を意識した授業に取り組むことによって、これまでの内容が基になる学力はもとより、資質・能力が重視している「思考力、判断力、表現力等」や「学びに向かう力、人間性等」などの学力もより確かなものになっていくと考えられる。

そもそも教科で育成する「見方・考え方」は、子どもの中に潜在的に有するものであって、教科指導において、それぞれの場面で顕在化させ、働かせて学習することにより、一段高い「見方・考え方」に高めていくことができる。絵本は、いろいろなテーマで描かれている。一人一人の多様な「見方・考え方」を働かせ自分の考えをしっかりともち、他者とともに絵本を教材とした学習を進めていくことで創造的思考が養われる。絵本が教科の特性に応じたテーマの資料として柔軟に活用されたとき、子どもたちの「見方・考え方」は、学びの動力となって働く。

(4) 絵本を活用した授業づくりを通して育成する教師力

授業では教科書を使っただけの学びだけに留まり、伸びようとしている子どもの思考力を止め

てしまっている場合がある。若手教師が増え続ける中、現代の教科書は、子どもたちの学び方だけでなく、教師の授業づくりに対しても、一つのマニュアルのように丁寧に作られている。そういう側面もあってか、教科の指導として教科書通りの学習から、さらに発展・向上していく学びになりにくい。各社の国語の教科書には、発展的な作品として、いくつかの書籍が紹介されている。また、いろいろな学校で読書リスト等を作成し、読書活動の推進を図っている。しかし、それはあくまでも子どもたちの主体的な読書を促す働きかけであって、主に読書習慣を育成することに目標がある。発展学習として、子どもたちに委ねているだけでは主体的な学びの姿は育たない。単元の学習を終えた後、子どもたちがさらに興味関心を高め、自分の中に育った力を使いながら次の課題に向かい意欲的に自分を高めていく姿に変容することができるよう、教師には学習活動をしっかりと構築していくことが必要である。

絵本の読み聞かせをして「どう思った」「どこが好き」だけでは、子どもたちの思考力に働きかけ、学校での人とのかかわりの中で学びに変えていくことはできない。授業化するには、絵本からの学びを読み手に委ねてはいけない。子どもたちに育てたい力に向けて、教材としての絵本を選定し、効果的な提示の仕方や授業を構築し実践してこそ、子どもたちの内包する力を引き出すことができる。例えば、言語能力や情緒や感性といった幼児期において多くの絵本と出会った子どもたちに育成された力を、学校教育においてどう高めていくことができるか。言うまでもなく学習活動として成立する授業を、しっかりとした思いをもって指導していくのは教師の重要な役割である。

小野間（2020）は、これからの教師に必須な能力として、子どもたちの願いをいかした内容や方法を創造する「単元構想力」を挙げている。

授業は教師が子どもたちに経験してほしい価値に触れることが可能な活動展開の場であり、教師には子どもたちの実態に応じてデザインしていく力が求められている。

授業を構成する上で重要な要素はいくつかあるが特に「発問」「指示」を明確にすることを大切にしたい。子どもたち自身が自分の気づきを意欲的に表出できる絵本を活用しての授業を構築していく中で、教材としての絵本をどの場面で活用するのかという授業プランをたて、授業デザインを描くことには欠かせない要素である。絵本との出会わせ方や適切な問いかけなどを行うことで、子どもたちの中に気づきが生まれ、自分の中の見方・考え方を働かせながら、その課題解決に向けての創造的思考力を育むことができる。だからこそ、授業者としての教師は「どの絵本を」「どんな場面で」「どのように使って」「どう問いかけるか」を練り続ける必要がある。内容のある質の高い授業を構築する力は教師サイドにある。子どもたちに育成される力の向上は教師力の向上と共にある。(図2)

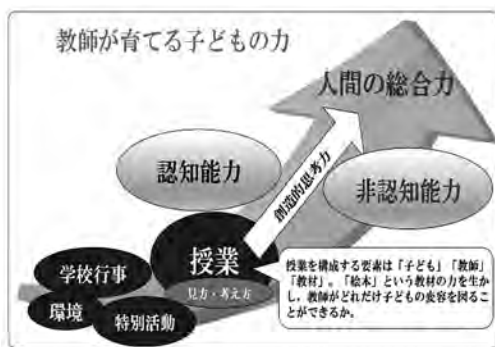


図2 絵本を通して育てたい力

4. 学校教育における絵本の教育的効果

(1) 学校教育における絵本の役割

これまでも教科教育だけでなく学校行事や学級活動など、目指す子どもの姿に迫る手立てとして、現場で絵本の活用はされてきた。「この時にはこんな絵本」「この場面ではこの絵本」

といった、それぞれの指導者の思いをもった絵本が無数に活用されてきたはずである。しかし、それらの実践が教育課程に位置付けられ、まとまった形で発信されることはあまりない。これは、絵本が教材として活用されることより、学級経営や特別活動の一つのアイテムとして「読み聞かせるだけで有効な手段」として止まってきたからだと考えられる。

現在、国語科での活用は、教科書教材を発展させたり、同じ作者の作品の並行読書をししたりする活用が主である。絵本の特性をいかして他の作品を主教材として授業化したり、国語科の学習内容を深める教材として活用したりする実践が少ない中、山元(2014b)は、国語教育及びリテラシー教育に着目し、現代絵本が「読解力」育成に果たす役割と有効性を明らかにしていくことが、言語活動の充実を図る上でも大切だと主張する。絵本のもつ力が国語教育において有効なことは多くの先行研究から立証されている。

道徳科においては、教科書教材として絵本そのものが素材となり取り扱われていることが多いが、ときには目の前の子どもたちに実態や課題に応じて、別の教材を取り入れたり、補助教材として工夫したりすることも必要になる。そのとき、多様なテーマをもつ絵本は優れた教材としての力を発揮する。佐々木(2000b)は絵本のテーマがどのような人間関係や環境設定のもとに描かれているのかを知るために、「生活と自立」「自我・自己形成」「友だち・遊び」「性格」「心」「家族」の6つのテーマに整理し、データベース化を図っている。このように絵本から伝わるテーマが道徳科の内容項目とうまく合致させることができれば、絵本は教材として取り入れやすく、とても有効な素材であることは言うまでもない。

(2) 絵本教材の現状

①国語科

では、絵本は学校教育の教材として、どのように取り扱われてきたのだろうか。すべての子どもたちが出会うであろう教科書教材。戦後の小学校国語教科書に掲載されている教材を調べてみると、昭和、平成、令和と時代が変わっても、掲載され続けている作品がある。その中には絵本から転載されたものや、童話や物語といった文学作品から絵本化されたものもある。

第1学年では、「おおきなかぶ」（ロシア民話）が各社に掲載されている。トルストイが再話したものを光村図書では西郷竹彦が訳したもの、他は内田莉莎子のものを掲載している。この話は訳者によって、クライマックスの場面での視点が違っている。1968年から現在まで変わらず掲載されているこの話が1962年に絵本として出版され、60年以上に渡って採用されているのは、展開の面白さと分かりやすさ、音読や動作化などの表現活動など、いろいろな授業での要素が含まれているからだだろう。「スイミー」（レオ・レオニ）は第1学年と第2学年に掲載されており、1977年から各社に掲載されている。また、第2学年では「お手紙」（アーノルド・ローベル）も定番となっており、1980年からの掲載である。

これらの低学年教材として位置づいた作品は、外国の絵本がもとになっている。教科書掲載においては、いくらか絵が削減されたり、文が改編されていたりする場合もあるが、会話や描写から低学年の子どもたちに読み取りやすく、主人公たちの思いに寄り添いながら学習を進めていくことができる。

第3学年では「モチモチの木」（斎藤隆介）が全社に掲載されている。1977年から続くこの作品も絵本の原画を担当する滝平二郎の絵を取り入れながら掲載しており、映像としての読み取りを大切にしていることがうかがえる。

第4学年は、「一つの花」（今西祐行）は1977年から、「ごんぎつね」（新美南吉）は1956年から全社に、「白いほうし」（あまんきみこ）は1971年から3社が掲載している。中学年では、これらの日本の作家たちが表現してきたものを時代が大きく変化していく中でも大切にしてきた。それぞれ絵本化され映像としても親しまれている。

第5学年では「大造じいさんとガン」（椋鳩十）が1961年から文学教材の定番として置付いている。教科書の挿絵では会社ごとに大造じいさんの描き方が異なっており、のちに出版されている絵本もそれぞれの表現が違っているが、いずれにせよ主人公2人の関わりをダイナミックに感じることができる作品である。

第6学年では「川とノリオ」（いぬいとみこ）は1980年から、「きつねの窓」（安房直子）は1977年から、教育出版と学校図書が掲載しており、「海のいのち」（立松和平）は1996年から、光村図書と東京書籍が掲載している。高学年においては主人公の心の動きをとらえるのに情景描写や視点といった表現に着目しながら、主人公の生き方について自分なりの考えをもつことがテーマにあり、子どもたちの成長過程において、出会わせたい作品である。

学習指導要領の改訂により、それぞれの時代で教科書教材は少しずつ変化してきた。教材の中には、その時期の教育の特徴的なものも垣間見ることができる。国語教科書に掲載されるものには、それぞれの時期により新しく掲載されたり、削除されたりしたものがある。また、作品としては継続し続けているが、単元としての目標の設定が変わったり、主としての取り扱い内容が変更になったりしているものもある。

最も長く教科書掲載されているのは「ごんぎつね」であるが、この作品は一時期、読み物教材としてではなく、教科書の最後にある発展的教材として位置付けられたこともあった。この

話が定番として位置付いていることで子どもたちだけでなく、その親や祖父母の時代までつながり、家庭でのコミュニケーションの一つの題材となっている。前述した「モチモチの木」は1980年からの教科書からは掲載されず、再び掲載されたのは1992年からである。1980年は学習指導要領が「ゆとりある充実した学校生活の実現＝学習負担の適正化」とし、学習内容を絞り、ゆとり創造を打ち出した頃である。この流れの中で一時期、削減されたのであろう。「つり橋わたれ」（長崎源之助）は現在、学校図書に掲載されているが、他社からは消え、「かさこじぞう」（岩崎京子）は光村図書出版から消えている。「わらぐつの中の神様」（杉みき子）、「茂吉のねこ」（松谷みよ子）「手ぶくろを買いに」（新美南吉）等の定番だった作品も消えた。

主に低学年では大きく変化せず、長く続く作品が多い。発達段階に応じて必要な力をその時期にこそ学んでいく必要がある。しかし、高学年においては、時代によって作品が変わったり、削減されたりして、絵本関連の作品と出会うことが少なくなっている。

授業展開や学びのスタイルは変化しても、その作品に出会うことで、子どもの中に自分なりの思いをもたせていきたい。標準の授業時間だけでは、じっくりとその作品に浸ることは難しい。授業展開や家庭学習の工夫をしたり、テーマを決めた並行読書をしたりすることで作品と向き合う時間を有効なものにする手立ても必要である。

②道徳科

教科化されたことにより、教科書を使用することになった。明確な内容項目のもとに、目標の達成に向けての授業展開を行わなければならない。そのため画一的な授業になり、決められた内容項目を子どもたちに押し付けていくことも懸念される。道徳教育の目標は、「自己の生

き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として、他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことにある。答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の子どもが自分自身の問題として捉え、向き合っで学んでいく。そういう多様な授業づくりが重要であり、授業においては中心となる道徳教材の教材力も大きく関わってくる。

平成30年から初めて使用された8社の道徳教科書において、絵本との関係がどれだけあるかを分析した。抽出したものは、「絵本から転載されたもの」「詩や文学作品から絵本になったもの」「道徳教材から絵本化されたもの」「昔話や童話として語りつがれ絵本になったもの」である。

各社の絵本教材掲載数を比較してみると、学校図書が「37」、続いて東京書籍が「33」となり、平均は「約25」になる。各学年においては第1学年から第6学年までの道徳標準時数が「209」であるので、全体平均で考えると約12%の使用率となる。

低学年では、「はしの上のおおかみ」（奈街三郎）、「かぼちゃのつる」（大蔵宏之）、「2わのことり」（久保喬）など、定番の道徳教材から絵本化されたり、「七つのほし」（トルストイ童話）、「金のおの」（イソップ童話）といった外国の童話から定着したりして従来から各社で使用されているものがある。中学年においては「泣いた赤おに」（浜田廣介）、「花さき山」（斎藤隆介）といった長年にわたって親しまれている絵本があると同時に、「ええところ」（くすのきしげのり）、「わたしのせいじゃない」（レイフ・クリスチャンソン）、「いのちのまつり」（草場一壽）など、近年、絵本として発行されたものが、授業の中で取り入れられ、現場の実践として広がりながら掲載されたものもある。

教科書で使用される挿絵については、各社の編集段階において教科書用に改編され原作とは

異なるものとなっている場合がある。出版されている絵本の挿絵をそのまま教科書の教材としての使用しているものはあまり多くない。

「内容項目」で比較すると一番多いのは「感動、畏敬の念」であり、次に「生命の尊さ」といった「主として生命や自然、崇高なものとの関わり」に関することである。そして「友情・信頼」「親切・思いやり」といった「主として人との関わりに関する事」となる。これは話合い等を取り入れる展開が比較的難しい「感動、畏敬の念」「生命の尊さ」に関する指導を、絵本本来の力を活用して指導することがねらいであると考えられる。使用学年の違いはあるが各社とも「花さき山」や「幸せの王子」（オスカー・ワイルド）を掲載しており、話のもつ力から、心情への問いかけをしている。

絵本にはその時代背景を映し出し課題が感じとれるものや従来からの価値観を継承していくものなどがある。これらの絵本がもっと道徳教材として位置付き、活用されることが望まれる。

(3) 絵本を教材として用いることの意義

①国語科

国語科において絵本はすでに教材として位置付いている。しかし、それは教科書教材として編集され掲載されたものであり、原作の絵本とは異なるものも少なくない。学習時にはその作品の構造や登場人物など、国語科の視点をもった学習をしていく。この学習過程において、教材以外の絵本を取り入れていくことでどんな効果が生まれるだろうか。

森川（2020）山元（2014c）のように絵本が子どもたちの育ちにどう関わるかの先行研究は数多くある。また、その効果についてもいくつか立証されてきた。「言語発達」「社会性・情緒的発達」「読書へ意欲・関心」などの観点から研究されているが、国語科においてはとりわけ「言語発達」「読解力の育成」「読書習慣の定着」な

どの観点からその有効性が見受けられる。

教科書教材だけではなく、そこに絵本を教材としてプラスしていくことで、授業展開の工夫や主題に迫る具体的なアプローチの仕方といった授業を構成していく要素がより一層広がる。面白くない、興味がわからない授業では子どもたちの主体的な学びにはつながらない。主体的な学びの中で自らが出会った課題解決に向け、内在する学びの力を使い自己決定しながら、自分にとって必要な資質能力を養っていくのである。絵本という要素をもっと取り入れることで、授業に向かう多くの子どもたちの考えを多様に引き出しながら、育成すべき力をより深化・向上させることができる。

②道徳科

渡辺（2011b）は、「思いやり」という、ある意味、漠然とした概念を「社会的視点調整能力の向上」として考えた。視点の分化と深化の力を伸ばすことが、互いに尊重し合い、円滑な対人関係を導く行動の選択につながるという考えのもと、絵本を通して「思いやり」という概念が育つことを子どもたちの表現活動や行動を具体的に分析することを通して明らかにした。

人工知能が急激に進歩する中、世の中の事象は事実だけを捉え、決まった正解だけを導いていけばよいのではない。答えのない課題に向けて、他者とかかわりながら協働して目的に応じた答えを導き出す、他者の「心」を受け止めながら、これまでに身につけた力を使って表現し、行動していく。これが、人間だからこそできることである。この「心」に目を向けることが、道徳科では特に必要な視点となる。

道徳科の目標は「物事を多面的・多角的に考えること」「自己の生き方について考えを深めること」である。決まりきったことを言わせたり、登場人物の心情を読み取ったりするだけの授業では「多面的・多角的に考える」学習には

ならない。絵本を通して、様々な場面と出会い、他の考えに触れることで自分の中の「道徳的価値」を吟味することができる。

道徳教材として掲載されているものは、その目的達成のため、決められた目標に向かって授業展開がなされる。教科書教材としては当然のことである。しかし、それは時には子どもたちの素直な思考を湾曲させながら、教師の意図するところへもっていくことにもなりかねない。道徳の授業において、大切なのは子どもたちに価値を植え付けるのではなく、価値の種をまくことである。子どもたちの実態や興味に対応した絵本を道徳教材としても取り入れることによって、子どもたちの思考がより柔軟になり、思いを自由に出し合える導入や授業展開が期待できる。

5. 絵本の活用の構想と実践

(1) 多様な考えを引き出す授業展開の工夫

国語科では「内容を深く読み取り、言語活動につなげていく1冊の絵本を主教材とする授業」「学習の目標に向けて子どもたちの興味関心を高めるため導入として提示する授業」「終末のまとめとして、読み聞かせ内容の定着を図る授業」「絵本の中に描かれている情報が資料として扱うことができる授業」などが展開されてきた。道徳科では絵本のテーマと道徳の内容項目があったものを、授業のメインとして取り扱い、授業の発問や活動を工夫しながら展開に応じた場面で活用されている。

どちらの教科においても、教科書が存在しているため使用は基本であるが、それだけでは今一つ物足りない場合がある。絵本は各教科において主役ともなり脇役ともなりうる力がある。その力をいかすために、読み聞かせて感想を書いたり、自由に話し合ったりすることではなく、めざす子どもに姿に迫ることができる授業展開を工夫しなければならない。パターン化された

授業ではなく、教材に出会ったとき子どもたちの中に学びに向かう興味や意欲がわき、その学びの過程で出会う課題解決に向け、自らの思考を巡らしよりよい考えを導こうとする学習展開をすべきである。絵本から感じ取る自由な思考をいかし繋げていく展開や論理的思考を促す発問など、教師が柔軟に授業を構成し実践していくことが必要である。

(2) 具体的な姿からの分析と検証

授業では、従来から子どもたちの具体的な姿そのものを見ることで評価されてきた。授業者は目の前の子どもたちの事実に基づき、授業中においても評価をしながら展開を修正したり、工夫したりする。子どもたち自身も授業開始時と後とでより多くの修正がなされたり、価値ある変容がうまれたりする。価値ある授業には次のような子どもたちの姿がある。

- ・考えが広がる。深くなる。重くなる。
- ・誤りが発見される。わかる。修正される。
- ・根拠が見つかる。発言できる。判断できる。
- ・感じなかったことが感じられてくる。
- ・つまらないと思っていたことが、おもしろく思われてくる。
- ・わからなかったことがわかってくる。

これらの表れによって、授業の中に子どもたちの変容があったか否かを評価することができる。評価には具体的な子どもの姿を見る目を教師自身が必要とされるのだが、この見えにくい部分についても、次の様な方法で探る。

①共起ネットワークによる分析

授業後における子どもたちの感想を、樋口(2017,2022)を参考に、KH Coder3(Ver.3Beta06d)を使用して、頻出語の共起ネットワークの検出等を行って解析する。共起ネットワークでは、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークで描くこ

とができる。また、いくつかのグループに分類されるので、子どもたちがどんな視点をもって授業に取り組んでいたかを見取ることができる。これにより授業でのキーワードを捉えるとともに、抽出された言葉がどう構造的に関連し合っているのかを分析する。

②「思考の視点」の活用

個々の子どもたちの授業における小さな変容をひとつの事例として分析、考察し、その子の中にどのような変容が生じたかを捉えることで評価する。この非認知的な力を見取るには、めあてに向かう子どもたちの具体的な姿を評価基準として設定し、その姿と照らし合わせると同時に、実際に捉えた子どもの姿や記録をピックアップして分析する。

新川（2018）は、道徳科の授業において、子どもたちの姿を分析するための具体的な視点を整理している。創造的思考を巡らす子どもたちの姿を捉えるには、子どもたちの言葉の中から、「立場を変えて検討する（登場人物）」「条件を変えたり、仮説を立てたりして検討する」「複数の意見をもとに、新しい考えをつくったり、まとめたりする」ことを示している。この視点を、道徳科だけでなく、国語科等においても、学び合う子どもたちの具体的な姿を見取るために応用する。

③評価シート

道徳の授業を実施した6年生2学級には、研究授業前と研究授業を終えた1か月後に「自己肯定感評価シート」を活用し、その傾向を見ることとした。授業での学びがどれだけ実生活の中にかかれ、子どもたちに意識の中に育ったかを見取るために、授業後しばらく時間を空けてから実施した。

(3) 授業実践の概要と成果

①学習の終末の活用を通して学びを深める（国語科）

ア 詩「生きる」（谷川俊太郎）〔光村図書〕【6年国語科】

授業では言葉を中心に、それぞれの連が象徴するものや作品の主題について話し合い、個の読みを高めていく。単元の終末に、絵本「生きる」の読み聞かせをする。それぞれ実態が異なる2つの集団への授業であるが、児童の感想を分析し、比較すると、どちらの実践においても、「普通」の「日常」が自分たちが「生きる」瞬間であるという、詩の主題に迫る読みを深めている姿がうかがえた。これは、作品の分析や言葉の学習で終わるだけではなく、子どもたちがある程度作品の内容をつかみ、既知のものとして学習を終えようとするところに「絵本」を取り入れ、新たな未知のものを資料として示したことで内容を深めることができたことと捉えることができる。個々が自分なりに作品を捉えた後、当たり前の日常を描いた絵本を提示することで、さらに深い読みにつながり、子どもたちの「なるほど」が新たな「あれ」に変わり、見方・考え方を働かせながら、課題解決に向かう姿になる。子どもたちが創造的思考を巡らせ、よりよい未来に向けての思いをもつことで、今までの自分を振り返り、向上的に変容している姿になった。

イ「やまなし」（宮沢賢治）〔光村図書〕【6年国語科】

宮沢賢治作「やまなし」は、6年生の子どもたちにとって難解な作品の1つである。初発の感想では、子どもたちから多くの疑問が出された。この疑問と教師が子どもたちに身につけさせたい力をもとに前半の授業を構成し、個々の読みを深めた。後半は、グループで次のような展開で学習した。

「6冊の絵本を読む」→「ワークシートに評

価とコメントを書く」→「ワークシートをもとに交流する」→「全体で共有し、評価のポイントをもとに作品イメージを深める」

同じ文章から多様な表現で制作されている絵本の比較を通して次の3つの高まりが感じられた。

- ・読者として作品から受け取るイメージは、人それぞれでいい。それぞれが思いをもつそのことに価値がある。
- ・絵本という視覚的イメージがあるものに触れることで自分の中にまた違うイメージがうまれ、さらに広がりや深まりがあった。
- ・6冊の絵本を比較することで、難解だった作品について個々に自分なりの評論ができるようになった。

②登場人物との思いと自分を重ね、議論する（道徳科）

【6年道徳科】

- ・主題名 自分らしく生きる A (4) 個性の伸長
- ・教材名：「たいせつなきみ」

マックス・ルゲート（いのちのことば社）

寓話である絵本を主教材とする授業。6年生の子どもたちが、主人公の心の変化とどれだけ同調しながら自分を振り返ることができるかがポイントである。絵本の世界を客観的に見るのではなく、自分たちに身近なところにも似たようなことはないかという、自分事として捉えながら考えることができるように展開や発問を工夫した。対象は、実態の異なる2つの集団である。展開の大綱は同じだが、児童の反応により補助発問や展開は変わってくる。しかし、授業後の振り返りを比較してみるとどちらの学級でも「自分」「大切」「自信」「信じる」などのつながりから、寓話の中の登場人物と自分を照らし合わせながら、テーマについてしっかりと考えをもって学習した姿を見取ることができた。

③展開を予想し、主題にせまる（道徳科）

【5年道徳科】

- ・主題名 自分らしく生きる A (4) 個性の伸長
- ・教材名：「てん」 ピーター・レイノルズ作／谷川俊太郎訳（あすなろ書房）

道徳科の授業で教材の提示の仕方は様々である。よく見られるのは、主題に関連する子どもたちの日常を振り返り、本時のテーマを意識させながら、教材を教師が「範読する」導入。しかし、本実践では最後まで範読を行うのではなく、子どもたちとともに次の展開を予想しながら徐々に教材の中に引き込み、絵本のストーリーの面白さと自分の考えが展開とともに深まっていくことができるようにした。

主人公が「自分と同じように絵が苦手な子に自信をもたせる行動に変わっていった」という絵本のストーリーを予想しながら、中心人物の変化の過程を考えることで、課題に対して「自分だったら…」と考え、主体的に学ぶことができた。また、多くの子が積極的に授業参加する姿が見受けられた。

振り返りの言葉からは、「苦手なことがあっても自分に自信をもって、進んでいこう」とする姿勢が伝わってきた。実施した対象学年は日常でも、積極的にいろいろなことに挑戦したり、下学年の子どもたちに優しく関わったりと、高学年として自分を高めようとする姿がある。思いをもつだけでなく、学びが目に見える言動として表れており、非認知の力が学校生活の様々な場面で見受けられた。

6. 絵本の活用を通して見えてきたもの

本研究では、絵本を教育現場において積極的活用することの教育的価値を見だし、絵本を活用した授業実践に基づき、子どもたちの非認知能力の育成や教育的意義について明らかにすることを検証した。

子どもたちの学びの過程において、絵本の

有効性は誰もが知るところであるが、先行研究や教科の年間計画を調べる中で、現在の学校現場でその有効性が十分にいかされていないことがわかった。絵本を活用した授業では、どの子も45分の授業の中にしっかりと入りこみ、自分の考えをもちながら仲間とともに話し合いを交わし、そして終末には授業前と後の向上した自分を実感する、そんな場面が多く見受けられた。これらの授業では、子どもたちが自分なりの課題をもちながら、見方・考え方を使い、よりよい考えを導こうとする創造的思考を養うことができた。また、何気ない日常の話題や自分の将来についての話の中に、絵本から学んだキーワードも出てくる。このような子どもたちの姿から、「自分と向き合う力」「自分を高める力」「他者とつながる力」の学校で育つ非認知能力が子どもたちの中に育成されていると考えることができる。

6年道徳科では授業前後に行った非認知能力につながる「自己評価シート」で、「人とちがっていても自分が正しいと思うことは主張できる」「私は自分の長所も短所もよくわかっている」「私にはだれにも負けないものがある」「自分にはいいところがあると思う」の項目で、子どもたちの思いが向上したことがうかがえた。これは、今回「自分らしさ」「個性」などのテーマで学習したことが、自分の中に一つのフレーズとして残っていると捉えることができる。1時間の授業で子どもたちが大きく変わることはない。その時間での学びが日常の生活と結びつき、自分を形成していく見えない力を育んでいく。絵本の魅力に教室にいるすべての子どもたちがその世界に浸りながら学習に参加し、身近な仲間との学びの中で自己表現がしっかりとできることで、考えが行動となり、自分を形成していく。絵本活用を定期的に効果的に継続していくことで、学んだことが新しい自分を形成する一つの力となる。

絵本のテーマは様々である。また次々と多様なテーマの絵本が発行される。これらの新しい時代にあったテーマの本の活用や時代を超えて受け継がれる絵本を学校教育にどう取り入れることができるか。その具体的な実践や事例の研究はまだまだ足りない。授業への活用方法の在り方にしても、絵本自体が読むこと、子どもたちが直接触れることを主に作成されているので、読み聞かせだけで長い時間を取り、子どもたちが対話する時間が確保できないことがある。自分の思いを発信したり、他と共有したりすることで、その思いは深化する。どんな場面でどのような活用の仕方があるのか、その絵本のもつ良さを最大限にいかすにはどうするかななどを検討し、質の高い授業を構築することが今後求められる。絵本の教材化に焦点をあてた研究は、今後も子どもたちの非認知能力を育成するために有効であり、他教科での学習など、様々な教育活動に位置付けていくことで、さらに確かなものになる。教師が絵本の有効性をいかにせる授業をもっと積極的に取り入れ、質の高い学びを積み上げ、様々な事象に子どもたち自身が自分事として関与し、考えを巡らせ判断・行動することができる力を高めていくことが必要なのである。

本論は、令和4年度に関西福祉大学大学院教育学研究科に提出した修士論文を要約修正したものである。

【引用・参考文献】

- 小学校学習指導要領 平成29年告示文部科学省
 石崎理恵（1995）「絵本から見た子どもの世界－絵本研究の動向－」金沢大学大学教育 解放センター紀要 第15号 pp.27-36
 出井桂治（1994）『4年－子どものやる気を引き出す教育技術』向山洋一（編）明治図書 pp.194-201
 遠藤利彦（2017）「非認知（社会情緒的）能力の発達

- と科学的検討手法についての研究に関する報告書」
『平成 27 年度プロジェクト研究報告書』国立教育
政策研究所
- 小野間正巳 (2015) 「思いやり育成プログラム」によ
る道徳授業－K 小学校の実践事例から－関西福祉大
学発達教育学部研究紀要 創刊号 pp.55-67
- 小野間正巳 (2020) 『かわりて育つ学び』金木犀舎 p.13
- 加藤映子 (2020) 『思考力・読解力・伝える力が伸び
る ハーバードで学んだ最高の読み聞かせ』かん
き出版 pp.22-26
- 齊藤和貴 (2022) 『豊かな心と思考力を育む 絵本で
広がる小学校の授業づくり』小学館
- 佐々木宏子 (2000a) 『絵本の心理学－子どもの心を理
解するために－』新曜社 pp.1-25
- 佐々木宏子 (2000b) 『絵本の心理学－子どもの心を理
解するために－』新曜社 p.11
- 佐々木宏子 (2000c) 『絵本の心理学－子どもの心を理
解するために－』新曜社 pp.27-42
- 三森ゆりか (2002a) 『論理的に考える力を引き出す②
絵本で育てる情報分析力』一声社 pp.9-11
- 三森ゆりか (2002b) 『論理的に考える力を引き出す②
絵本で育てる情報分析力』一声社 pp.26-27
- 三森ゆりか (2002c) 『論理的に考える力を引き出す②
絵本で育てる情報分析力』一声社 p.19
- 新川靖 (2018) 「道徳授業における子どもによる意味
の発見と思考の視点の明確化」『道徳と教育』日
本道徳教育学会 第 336 巻 pp.29-39
- 鈴木千春・永田智子 (2017) 「学校教育における教材
としての絵本活用の意義と可能性」兵庫教育大学
学校教育学研究 第 30 巻 pp.159-165
- 多賀一郎 (2018) 『絵本を使った道徳授業の進め方』
黎明書房
- 中山芳一 (2020) 『家庭、学校、職場で生かせる！自
分と相手の非認知能力を伸ばすコツ』東京書籍 p.32
- 根岸良久・庄井良信 (2019) 「絵本の読み聞かせと社
会情緒的コンピテンスの涵養－幼小接続期における
AL の原初形態に関する教育学的研究－」北海道教
育大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻研究
紀要 16 pp.37-51
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分
析【第 2 版】－内容分析の継承と発展を目指して－』
ナカニシヤ出版
- 樋口耕一・中村康則・周景龍 (2022) 『動かして学
ぶ！はじめてのテキストマイニング－フリー・ソフ
トウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析－』
ナカニシヤ出版
- 森川拓也 (2020) 「絵本を論理的に・構造的に理解す
ることについての考察－絵本を国語教材に用いる
意味－」桜花学園大学保育学部研究紀要 第 21 号
pp.139-155
- 山元隆春 (2014a) 「読み書きカリキュラムにおける絵
本の役割：Frank Serafini (2014) Reading the Visual
を手がかりにして」全国大学国語教育学会国語科教
育研究：大会研究発表要旨集 127 巻 pp.49-52
- 山元隆春 (2014b) 「『読解力』育成に果たす絵本の役
割－現代絵本を使って『文学的要素』を教える試み－」
論叢 国語教育学 第 10 号 pp.71-89
- 山元隆春 (2014c) 「『読解力』育成に果たす絵本の役
割－現代絵本を使って『文学的要素』を教える試み－」
論叢 国語教育学 第 10 号 pp.71-89
- 山田梨紗子 (2020) 「絵本を教材として用いる意義－絵
本の良さを生かした授業実践の検討－」山形大学
大学院教育実践研究科年報 第 11 号 pp.120-127
- 渡辺弥生 (2011a) 「絵本で育てる思いやり－発達理論
に基づいた教育実践－」野間教育研究所紀要 第
49 集 pp.44-48
- 渡辺弥生 (2011b) 「絵本で育てる思いやり－発達理論
に基づいた教育実践－」野間教育研究所紀要 第
49 集 p.165
- 日外アソシエーツ (編) (2008) 『読んでおきたい名著
案内 教科書掲載作品 小・中学校編』日外アソシ
エーツ
- 日外アソシエーツ (編) (2013) 『子どもの本 教科書
にのった名作 2000 冊』日外アソシエーツ

(令和 6 (2024) 年 1 月 31 日受理)

Abstract

Effective use of picture books to nurture non-cognitive abilities —Through classes in Japanese language and Moral—

Okayama Prefecture Lifelong Learning Center Keiji IDEI

In an era where the environment surrounding children is undergoing significant changes, fostering the development of latent inner strengths that may not be easily reflected in numerical terms becomes crucial. This study explores the effectiveness of actively utilizing picture books in educational settings to cultivate the foundation for children's enhanced growth, particularly in non-cognitive abilities. Based on classroom practices using picture books as educational materials, the research examines the value of picture books as teaching tools and investigates the abilities children develop through such practices. The analysis of the value of picture books as educational materials focuses on the subjects of "Japanese Language" and "Ethics," where picture books are already positioned as teaching tools. The study involves adapting teaching methods and approaches while conducting classroom practices.

In classes that incorporate picture books, many children actively engage, express their thoughts, participate in discussions with peers, and, by the end, perceive improvements in themselves compared to before the lesson. These classes facilitate the development of creative thinking as children tackle their own challenges, utilize different perspectives, and strive to arrive at better ideas.

Amid the rapid advancement of AI technology, there is a need to reconsider the importance and merits of analog methods. Teachers should more actively incorporate the effectiveness of picture books into their lessons, building up high-quality learning experiences to enhance children's internal intellectual abilities. Research focusing on the integration of picture books into teaching materials proves effective in nurturing children's non-cognitive abilities. As it extends into various educational activities across different subjects, it becomes even more substantial. Additionally, for teachers, it serves as an effective means to enhance teaching skills and create fulfilling lessons. In an ever-evolving era with a constant influx of diverse themes in picture books, harnessing the "power of picture books" enriches the shared time between children and teachers, effectively enhancing children's abilities.

Keywords : Picture Books, Non-Cognitive Abilities